

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00580

研究課題名（和文）言語文化に起因する価値観とフェイスが表出する「舌打ち」と「笑い」の実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Tongue Clicks and Laughter: Expressions of Values and Face Attributed to Language and Culture

研究代表者

萩原 孝恵 (Hagiwara, Takae)

山梨県立大学・国際政策学部・教授

研究者番号：90749053

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、非言語行動としてタブー視される「舌打ち」と、特におかしくもないところで笑う不可解な「笑い」に着目し、そのコミュニケーション上の意味を検討した。舌打ちについては、タイ人の舌打ちを分析対象として、非言語行動（舌打ち）が言語行動（発話）の連鎖の中で、どのように共起するのかをマルチモーダルに記述し、1) 認知行動系、2) 発話調整系、3) 感情表出系の3つに分類した。笑いについては、日本映画とタイ映画にみられる不可解な笑いをそれぞれ抽出し、日タイ双方の視点から共同研究を進めた。本研究成果は、タイ国にてパネルディスカッションおよび口頭発表という形で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「舌打ち」や「笑い」は通言語的であるにもかかわらず、そこには社会的・文化的・慣習的な用法が存在する。たとえば日本人は舌打ち音に敏感であるが、世界には日本人の知らない、日本語に存在しない舌打ちの用法がある。また特におかしくもないところで笑う不可解な「笑い」は、誤解や摩擦の要因となり得るが、こうした笑いに対して自文化や常識を持ち込んだ解釈はさらなる誤解や摩擦を生む危険性を孕む。本研究では、こうした非言語行動を、映像を通してマルチモーダルに分析することにより、グローバル化社会でますます重要になる異文化理解や異文化コミュニケーション分野への知見を提示した。

研究成果の概要（英文）：In Japanese culture, “tongue clicks” are usually described as paralinguistic vocalizations to signal disapproval or irritation. Yet, there seems to exist the other type of tongue clicks in Thai culture. Inexplicable “laughter”, which can be observed when people laugh at something that is not particularly funny, also implies some communicative functions. This study has focused on both tongue clicks and laughter to clarify messages and communicative meanings conveyed by native Thai speakers. Tongue clicks in Thai culture can be classified into three categories: 1) cognitive behaviors, 2) operative utterances and 3) emotional expressions. We have collaborated on joint research with Thai researchers, which has enabled us to observe both Japanese and Thai films to find and extract inexplicable laughter from each of our perspectives. We have presented the results of this study in academic conferences held in Thailand.

研究分野：語用論、社会言語学

キーワード：非言語行動 舌打ち 笑い フィラー 映像データ 異文化理解 異文化コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

「舌打ち」や「笑い」は通言語的であるにもかかわらず、そこには社会的・文化的・慣習的な用法が存在するのではないか。異文化接触場面で観察される「舌打ち」や「笑い」には、母語転用の可能性があるのではないか。たとえば、下記のような謝罪記者会見での朝青龍の舌打ちや、進路相談場面での学生の笑いが、その一例である。

【舌打ち】2007年12月に行われた記者会見の席で朝青龍は「これからも精いっぱい頑張っていきますので」と語った。しかし、記者の耳に届いたのは、言葉ではなく、非言語行動として出現した17回の舌打ちであった。(出典「JCAST ニュース」2007/12/03)

【笑 い】ベトナム人のナムさんが先生に進路の相談をした。ナムさんは真剣に“にやにや”話を聞いた。すると、先生が怒った。ナムさんは真剣に話を聞いていただけなのに、とひどく落ち込んだ。

(出典『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』)

朝青龍の舌打ちに関しては、清(2008)も取り上げている。しかし客観的な分析や考察はみられない。また、ベトナム人のこのような笑いはタイ人にもしばしば観察されるが、やはり紹介や説明に留まるものが多い。特に本研究が着目する異文化における舌打ちや笑いについては、そもそも研究そのものが少ない。映像をデータとする記述的研究は管見の限りほとんどない。

しかし、異文化接触場面での「舌打ち」や「笑い」が、いかに誤解や摩擦の要因になるかを明らかにすることは重要な研究課題である。その根拠として、筆者は2012年から2014年にかけて、ACTFL-OPI(Oral Proficiency Interview)の手法により、タイ人日本語学習者181名のデータを収集して文字化していく段階で、彼らの発話に舌打ちや笑いが「頻繁に、繰り返し」現れることを発見したからである。そして、2016-2019年度の研究期間(課題番号16K02633)において、発話に随伴する舌打ちや笑いが認知行動の現れであることを説明した。収集したOPIデータは、2018年に132名分の、タイ人学習者の発音・非言語・フィラーなどを忠実に書き起こした「タイ人日本語学習者話し言葉コーパス」として構築された。コーパスによっては、非言語行動が一切書き起こされていないものもある。たとえば、2015年に公開された「ドイツ語話者日本語学習者コーパス」である。コーパスで何を観察したいのかによって、「舌打ち」や「笑い」のような非語彙要素は、価値のないものと判断されたり、聞き流されたりするのかもしれない。しかし筆者は、村野(2001)の次のような指摘を重要視し、本研究課題を設定した。

一つ一つの非言語情報が発信する意味は、あらゆる文化に共通であるよりも、文化固有のものであることの方が、はるかに多い。しかも文化によって多様な意味を持つのである。…(中略)…。異文化コミュニケーションを考えると、言語によるコミュニケーションと同じように、非言語によるコミュニケーションの重要性と、誤解の可能性とその危険性を心にとめておかなければならない。(村野2001:152)

2. 研究の目的

本研究が着目したのは、非言語行動としてタブー視される「舌打ち」と、特におかしくもないところで笑う不可解な「笑い」である。本研究では、発話に伴って現れる「舌打ち」「笑い」がいかなる意味や機能を有しているのか、またそこに母語による転用はみられるのか、といった問いを立て、映像を通してこれらを観察し、その特徴を明らかにすることを目的とした。分析の範囲は、タイ、ベトナム、日本の3つの言語文化圏である。また、舌打ちや笑いと共に起性の高いフィラーについても調査した。フィラーに関する調査は、タイ人日本語学習者を調査対象とした2016-2019年度の研究において、非言語行動の一つと捉えられる舌打ちや笑いに、母語文化による慣習的な使い分けがみられたことを、フィラーを通して確認したからである(2016-2019年度研究課題16K02633)。

3. 研究の方法

本研究では、高梨(2016)のマルチモーダル分析を用いた。高梨(2016)は、発話には横軸と縦軸の2つの文脈があり、「言語行動、非言語行動とも、着目している行動が統合と連鎖のそれぞれの軸の上でどのような関係を持っているかを突き止めることがマルチモーダル分析の核心」(p. 63)であると説明している。

これまで萩原(2018)および萩原・池谷(2015、2016、2017、2018a、2018b)が行ってきた舌打ちと笑いの分析では、発話における出現位置、生起環境を視座としてきた。これは、高梨(2016)の下記図1を参照すれば、テキストと音声の2つの情報を通して横軸にあたる「連鎖的關係」を検討してきたといえる。しかし、今回の研究では、高梨(2016)を援用し、図2のようなマルチモーダル分析図を作成し、縦軸にあたる「統合的關係」も含めて検討する方法を用いた。なお、本研

究とほぼ同時期にフランス人の舌打ちに関する研究を発表した森田(2015)も、筆者らがこれまで行ってきたものと同じ音声を対象とした研究であり、映像を対象としたものではないことから、発話に付随する非言語行動をマルチモーダルに捉えた本研究の方法は、新たな試みといえる。

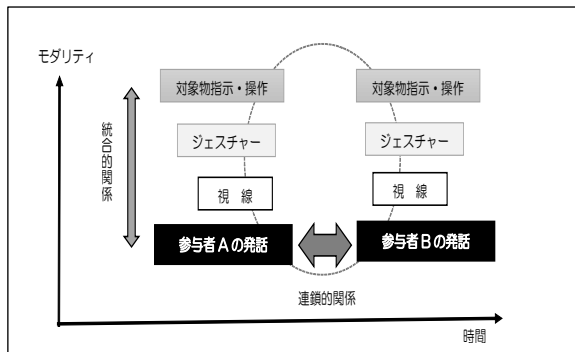


図1 高梨(2016:62)のマルチモーダル分析

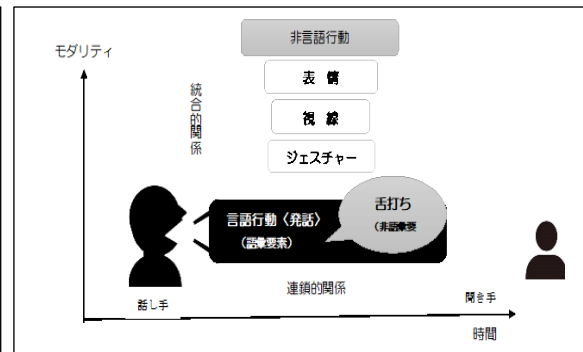


図2 本研究のマルチモーダル分析

4. 研究成果

(1) タイ人の舌打ちの類型化と他の言語文化への応用

2019年度は、3種類の映像データ(三者会話、二者会話、タイのドラマ)を使用し、時間軸に基づく発話の流れの中で観察される舌打ちと、舌打ちと共起する非言語行動(表情、視線、ジェスチャー)とを統合的に捉え、マルチモーダルの観点から分析した。その結果、タイ人の舌打ちは、

【1】認知行動系(a. 考えるとき、b. 説明する前)、【2】感情表出系(a. 「いい考え!」、b. うれしいとき)の大きく2つに分類できることを示した。本研究成果は原著論文として発表した。

2021年度は、調査対象を広げ、三者会話の映像データ(タイ人日本語学習者15名、3名×5組)を使用し、同様の手順でマルチモーダルの観点から分析した。その結果、2019年度に示した【1】認知行動系、【2】感情表出系に加え、【3】発話調整系(a. 展開型、b. 応答型)の舌打ちを発見した。本研究成果は、2021年8月にオンラインで開催された国際シンポジウムで発表した。

2022年度は、2021年12月に投稿した論文が刊行された。当該論文では、舌打ちが〈時間〉と〈モダリティ〉という2つの文脈の中で、どのように共起し、どのような意味で使用されているのかを映像データで観察し、タイ人の舌打ちには日本語に存在しないコミュニケーション機能があることを指摘した。

最終年度の2023年度は、これまでの研究結果を整理し、舌打ちの分類と用法を図3のようにまとめた。

分類 用法	〈認知行動系〉 舌打ち	〈発話調整系〉 舌打ち	〈感情表出系〉 舌打ち
用法	a. 考えるとき b. 説明する前	a. 展開型 / b. 応答型	a. いい考え! b. うれしいとき c. 「とても」「すごく」(副詞的)
意味	検討中	検討中	何れもあり
機能	フィラー的機能	フィラー的機能	相槌的機能
発話権	維持	維持	移動/維持
共通する特徴	<ul style="list-style-type: none"> 発話に共起する 単独で出現する場合もある(相槌のような用法、感動詞や副詞のような用法) 言語と非言語に二分した場合には非言語に分類されるが、視線・ジェスチャー・表情などの非言語行動と比較した場合、舌打ちはメタ言語的特徴を有するため、発話に近いといえる 舌打ちは、「非語彙要素」と捉えることができる(→これはWard(2006)の分類に基づくものである) 言語文化によっては言葉以上にメッセージ性が強い場合がある 		

図3 タイ人の舌打ちの分類と用法

本研究は、タイ人の舌打ちには日本語に存在しない、必ずしもネガティブではない舌打ちが存在することを実証し、言語文化によっては言葉以上のメッセージ性があることを指摘した。本研究成果は、2024年3月にタイ国日本語教育研究会で発表した。本結果は、舌打ちの類型化案として、他の言語文化における舌打ちの分類に応用できるものとする。

(2) ベトナム人、タイ人、日本人のフィラーの使用実態および使用傾向の分析

筆者は、これまでの研究(JSPI16K02633)から、舌打ちや笑いの直前・直後にはフィラーが共起するという知見を得ていた。そこで2019年度は、ベトナム人日本語学習者の発話に伴うコミュニケーション行動の傾向を把握するために、コーパスを使用して、フィラーの使用傾向を調べた。データは、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」(以下「I-JAS」)である。「I-JAS」に収録されているベトナム人日本語学習者50名と日本語母語話者50名を対象に、6種類の発話を調査し考察した。本

調査結果は、2019年12月にベトナム・タンロン大学で開催された国際研究集会で発表した。

2020年度は、前年に実施したベトナム人日本語学習者50名、日本語母語話者50名に、新たにタイ人日本語学習者50名を加え、フィラーの使用傾向を比較した。フィラーの使用に母語別集団性がみられるのかという観点で検討し、それぞれの特徴を記述した。本調査結果は、2021年3月にオンラインで開催されたタイ国日本語教育研究会で発表した。

2021年度は、同年3月に発表した内容を発展させ、研究論文として発表した。表1は、国立国語研究所の「I-JAS」をデータとしたベトナム人・タイ人・日本人のフィラーの使用実態である。研究論文では、これらを比較検討し、タスクごとにフィラーの使用傾向と母語別特徴を記述した。また、「えー」「えーと」「あー」によって表出される発話行動について図解した。

表1 「I-JAS」発話タスク別フィラーの使用実態（ベトナム人・タイ人・日本人）

発話タスクの種類	ベトナム人学習者(50人)	タイ人学習者(50人)	日本語母語話者(50人)
ST1: ピクニック	1.あー59.0% 2.えー 3.んー 12種類、741	1.えーと36.1% 2.あー 3.えー 10種類、354	1.えー69.3% 2.えーと 3.と 7種類、264
ST2: 鍵	1.あー64.1% 2.えー 3.んー 11種類、830	1.えーと35.4% 2.あー 3.えー 13種類、331	1.えー69.3% 2.えーと 3.と 8種類、231
I: 対話, 30分	1.あー59.0% 2.んー 3.えーと 24種類、10994	1.えーと34.0% 2.あー 3.んー 28種類、7734	1.あー39.7% 2.えーと 3.その 19種類、5276
RP1: 依頼する	1.あー59.0% 2.んー 3.えーと 15種類、1244	1.えーと36.9% 2.あー 3.あー 14種類、712	1.あー48.6% 2.えーと 3.えー 9種類、453
RP2: 断る	1.あー59.0% 2.んー 3.えーと 17種類、1149	1.えーと36.1% 2.あー 3.んー 14種類、696	1.あー43.2% 2.あー 3.えー 10種類、391

本結果は、フィラーが舌打ちや笑いとなぜ共起するのかといった問題解明につながるだけでなく、フィラーによって表出される発話行動の解明にも貢献するものであると考える。

(3) ベトナム人・タイ人・日本人の会話映像26本の文字化

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年3月に予定していた現地調査を中止せざるを得なかったため、2年目にあたる2020年度は、データ収集の方法を対面からオンラインに変更し、ZOOM(ウェブ会議システム)を利用した会話の収集を行った。ただし本研究が着目する舌打ちについては、対面であっても採取が困難であることから、笑いに関する調査に絞った。日本人会話参加者には事前に実施計画書を確認した上で参加してもらった。会話参加者は、タイ在住のタイ人8名、日本在住のタイ人8名、日本在住のベトナム人10名、日本人3名であった。収録時間は1時間程度で、日本人との初対面二者間の会話データを合計27本収集した。このうち1本はマスクを着用したままであったため除外した。

2022年度は、2020年に収集した日本語学習者と日本語母語話者による初対面二者間の会話データの文字化作業を行った。文字化は、タイで日本語を学ぶタイ人と日本人の会話8本(532分)、日本で日本語を学ぶタイ人と日本人の会話8本(487分)、日本で日本語を学ぶベトナム人と日本人の会話10本(673分)、計26本(1,692分)分で、笑いに関するインタビューを含む会話映像がデータとして完成した。

(4) 特におかしくもないところで笑う「笑い」の異文化

特におかしくもないところで笑う不可解な「日本人の笑い」の研究については、2021年度に開始した。「笑い」は日本映画から抽出し、日本文化に造詣が深いタイ人研究者2名と、日本語の笑いを研究している日本人2名によるパネルディスカッションをまず企画した。そして2022年3月にオンラインで開催されたタイ国日本語教育研究会で発表した。発表では、特におかしくもないところで笑う「日本人の笑い」が、タイ人の目にどう映っているのか、そこに文化差はあるのかを、解釈・評価・判断といった観点でアノテーションし、検討した。抽出した笑いは、映像をマルチモーダルに捉えて記述し、笹川(2020)を参照して作成した12枚の笑いのラベルを基に、日本とタイそれぞれの立場から議論した。

2022年度は、日本人からみた不可解な「タイ人の笑い」を、タイ映画から抽出し、同様の手順で検討した。共同研究の成果として、2023年3月にタイ国日本語教育研究会で発表した。

最終年度の2023年度は、日本とタイそれぞれの笑いの分類について研究討議した。会議はオンラインで定期的に行い、対面での意見交換も2回行った。また2022年度に検討したタイ映画の中の違和感のある「タイ人の笑い」と、記者会見で炎上した「日本人の笑い」を取り上げ、タイの大学で日本語を学ぶ大学生合計19名にインタビューをした。インタビューは半構造化インタビュー形式で、価値観やフェイスに関する質問を含めた。コロナ禍の影響で渡航制限が行われていた経緯もあり、最終年度となってしまったが、貴重なデータを収集することができた。なお「笑い」については新たな課題も生まれ、国際共同研究という形で、今後も継続して研究を進めていきたいと考えている。

<引用文献>

- ①笹川洋子(2020)『おしゃべりなボライトネス』春風社.
- ②清ルミ(2008)『ナイフとフォークで冷奴—外国人には理解できない日本人の流儀—』太陽出版.
- ③高梨克也(2016)『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版.
- ④萩原孝恵(2018)「笑いの異文化コミュニケーション—タイ人のフェイスとコミュニケーション・ストラテジー」『第3回国際シンポジウム紀要—グローバル化時代における日本語教育と日本研究—』 pp. 69-80.
- ⑤萩原孝恵・池谷清美(2015)「発話にみられる非語彙要素の再検討—タイ人の舌打ちに注目して—」『第10回 OPI 国際シンポジウム予稿論集』 pp. 34-37.
- ⑥萩原孝恵・池谷清美(2016)「集中的に舌打ちを発したタイ人日本語学習者の発話に関する一考察—」『日本語プロフィシエンシー研究』第4号、pp. 5-20、凡人社.
- ⑦萩原孝恵・池谷清美(2017)「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い—タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴—」『2017年第11回 OPI 国際シンポジウム台湾大会』 pp. 96-103.
- ⑧萩原孝恵・池谷清美(2018a)「苛立たない舌打ち」ヴェネツィア 2018年日本語教育国際研究大会発表資料.
- ⑨萩原孝恵・池谷清美(2018b)「タイ人学習者がインタビューテストで笑うとき」『山梨県立大学国際政策学部紀要』13、pp. 47-57.
- ⑩村野良子(2001)「第5章 世界の行動表現と非言語伝達」飛田良文編『日本語行動論』pp. 151-188、おうふう.
- ⑪森田美里(2015)「フランス人には聞こえない舌打ち音—日仏対照言語学的観点から—」『フランス語フランス文学研究』106、pp. 159-174.
- ⑫八代京子・世良時子(2010)『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』三修社.
- ⑬Ward, Nigel (2006) Non-lexical Conversational Sounds in American English. *Pragmatics and Cognition*, 14 (1), pp. 113-184.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 萩原孝恵、池谷清美	4. 巻 18
2. 論文標題 I-JASiにみるフィルターの比較 ベトナム人学習者、タイ人学習者、日本語母語話者の場合	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 萩原孝恵	4. 巻 25
2. 論文標題 舌打ちが伝えるメッセージ 映像データの観察を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6. 最初と最後の頁 586-592
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 萩原孝恵、池谷清美	4. 巻 第15号
2. 論文標題 タイ人の舌打ち マルチモーダルインタラクションにおけるその意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 萩原孝恵、池谷清美
2. 発表標題 なぜ今、舌打ちをする？ タイ人の舌打ちの意味と機能、そしてフィルターとの関係
3. 学会等名 タイ国日本語教育研究会第36回年次セミナー分科会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 秋原孝恵、池谷清美
2. 発表標題 リアルな会話にみられるリアルなフィラーの分析 「えー」と「ええと」と「ええとね」の違い
3. 学会等名 第1回タイ国日本語教育国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 秋原孝恵
2. 発表標題 ストーリーテリングとジェンダー I-JASにおける日本語母語話者の発話分析
3. 学会等名 第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（17th EAJS International Conference）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋原孝恵、Chomnard Setisarn、Yuphawan Sopitvutiwong、池谷清美
2. 発表標題 タイ人の微笑みは異文化コミュニケーションの不思議？
3. 学会等名 タイ国日本語教育研究会第35回年次セミナー分科会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋原孝恵、池谷清美、Chomnard Setisarn、Yuphawan Sopitvutiwong
2. 発表標題 日本映画における“笑い”は日本的？
3. 学会等名 タイ国日本語教育研究会第34回年次セミナー分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋原孝恵
2. 発表標題 舌打ちが伝えるメッセージ 映像データの観察を通して
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (16th EAJS International Conference 2020) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋原孝恵、池谷清美
2. 発表標題 あのう、フィラーを教えますか？
3. 学会等名 タイ国日本語教育研究会第33回年次セミナー分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋原孝恵、池谷清美
2. 発表標題 ベトナム人学習者と日本語母語話者 日本語フィラーの使用法の比較から
3. 学会等名 言語文化教育研究 国際研究集会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	池谷 清美 (Iketani Kiyomi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	シティサーン チョムナード (Setisarn Chomnard)		
研究協力者	ソーピットヴッティウオン ユッパワン (Sopitvutiwong Yuphawan)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
タイ	Chulalongkorn University		